

日本天文学会 2019 年秋季年会

修士 2 年 渡邊 優作

1 学会概要

日程：2019 年 9 月 11 日 (水)～13 日 (金)

場所：熊本大学黒髪南キャンパス (熊本市)

天文学会は北は北海道大学、南は鹿児島大学まで日本全国で開催されるが、近年は春が関東、秋は僻地での開催であるのが定番となっている。今年の秋は火の国・熊本であった。熊本市は、あまり知られていないが九州で 3 番目の都市であり政令指定都市でもある。さらに路面電車も現役で走っており、最近ではあの新宿バスタを彷彿させる日本最大級のバスターミナルが開業した (しかも天文学会最終日の翌日であり、この日に限り電車とバスに無料で乗車できた)。そんな熊本市にある熊本大学だが、大学への主な移動手段はバスであり、周囲に駅はないので、電車だけで向かうには骨が折れる。中には駅から歩いたという猛者もいたとか。大学の周りに料理店が軒を並べており、どの店も学生に優しい価格であったため、食に困ることはなかった。総じて評価をするならば、アクセスを除けば良好である。

2 学会報告

JpGU とは異なり日本人が多いため、今年の太陽セッションもよく知る面々が集っていた。しかし今年は異例の初日であったため、準備期間が短い上、前の発表を参考にすることも困難なため、不完全な状態で臨むこととなった。午前の部とポスターコアタイム、午後の部の順に執り行われた。ポスター会場は明るく、活気立っており、非常に議論しやすい環境であった上、興味深い研究が散見された。しかし学生である我らは積極的な学者に身を屈してしまい議論しづらかった印象であった。その後の口頭発表はまあまあの出来であったが、もう少し纏めていれば、発表時間で焦ることはなかったと思われる。こればかりは回数を重ね経験を積むに他はない。



図 1 熊本大学内の講演およびポスター会場



図 2 復興中の熊本城

ただ、質問が飛び交うかといえばそうではなかった。理解されなかっただろうか、伝わらなかっただろうか。中には笑いをとって雰囲気をもたせる学生もいたとか。また、最終日には太陽新展開、「Solar-C EUVST を軸とした将来スペースミッションと太陽研究の将来展望」と銘打ったセッションが行われた。参加者の顔ぶれは固定であったが、どちらも太陽の未来を考えさせられる内容であった。

3 あとがき

今回の天文学会は熊本という遠出ではあったが、体感としては短かった。遠くまでいった分、中身も昨年 (M1 時代) に比べて充実していたように思われる。その理由として、太陽の学界に携わってから年数を経たために守備範囲が広がっており、話題も容易に頭に入ってきたからだろう。遠方での学会は絶好の機会であるから、今後とも積極的に参加し、意欲を向上させたい。ちなみに来年秋の開催地は弘前大学、なんと青森県であり、熊本とは直線距離で 1,230km もある (名古屋からは約 680km)。次回も旅行気分の味わえそうな学会となりそうである。



図3 熊本と弘前 (青森県) (C)ONE COMPATH 地図データ (C)INCREMENT P